

「ことばの力」で新聞広告を作る（中学3年）

～多様な文体と「ことばの力」を意識した 「しあわせ」のキャッチコピー作り～

松原 洋子

＜要約＞義務教育最後の学年の国語実践として、既習の多様な文体・「ことばの力」を駆使し、「ことばの力」の威力と難しさを実感する機会を設けた。すなわち、大人を対象とする新聞広告コンクール(キャッチコピーの部)に応募し、「しあわせ」をことばで形にするのである。このゴールめざして、共に複数の教材を読み、「しあわせ」を語る切り口を考え、「ことばの力」を再認識し、作品作りと鑑賞を行った。その間、教師はたくさんの学び合いの仕掛けを工夫していった。

〔キーワード〕「ことばの力」「広告のキャッチコピー作り」「学び合い」「すてきに言い換え」
「しあわせ」

1. はじめに～研究の目的

中学3年生においては、義務教育最後の段階として、これまでの国語の既習内容を上手に応用し、正確かつ効果的に自分の考えを他者に発信する体験が必要であろう。そこで今回は、本来は大人を対象とする「日本新聞協会 新聞広告 クリエーティブコンテスト」に応募する作品を作るという具体的な目的のもとにさまざまな言葉の学習を含め、学習集団全員で学びあい、表現力を高めていく活動を行った。

2. 実践の計画

2. 1 育成を目指す言語能力

- ・文章を読んで人間、社会、自然との関係について考え、自分の意見をもつことのできる能力と態度
(「C読むこと」指導事項(1)エ)
- ・社会生活の中から課題を決め、取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること。
(「B書くこと」指導事項(1)ア)

2. 2 単元名 「ことばの力」で新聞広告を作る

2. 3 単元の目標

- ・さまざまな「しあわせ」論を読み、それをもとに自分の「しあわせ」論を表現する。
- ・ことばの持つ力に着目し、人の心を動かすような強い力を持つことばをえらび、表現する。

2. 4 単元の構成(全9時間扱い)

第1教材	古今和歌集仮名序・万葉集(復習)	・新聞記事	(1時間)
第2教材	『新しい博物学の時代』		(1時間)
第3教材	『伝え方が9割』	・新聞記事(DJポリス)	(1時間)
第4教材	「しあわせ」とは何か		(1時間)
第5教材	新聞広告作成・発表		(5時間)

2. 5 単元設定の理由

中学3年生は義務教育最後の年である。これまで様々な文章にふれてきた。

最近では、万葉集の学習を通して「言霊信仰」の不思議にふれ、この考え方が現代の私たちの日常生活にも影響を及ぼしていることを思い、ことばが持つ力について関心を持つようになった。

また、ことばの力による人間関係のトラブル・励ましなどは日常生活においても実体験する。

今回、ことばの力によって何万人のサッカーサポーターの気持ちをつかみ、逮捕者も怪我人も出さずにスムーズな誘導を行ったとして表彰された「DJポリス」の話題が、マスコミによって大きく取り上げられた。タイムリーなこの話題を「ことばの力」とのつながりとして位置づけ、「ことば」の持つ力を意識させること、また「ことばの力」のみを使った新聞広告作り（つまり、ビジュアル的な部分を排除し、ことばのみで成立させる新聞広告作り）を経験させることにより、「ことばの力」をより強く意識させることができるだろう。ことばをどのように受けとめ、使うかを意識し続けることは、まさに生徒の生きる力にも直結し、生涯学習にも役立つであろう。

そして新聞広告を作ることは、当然、さまざまな表現方法をも思いだして使うことにつながる。新聞広告を作成する中で、情報を収集し、相手を納得させる、感情に訴える、相手に行動させる、相手を楽しませる、といったことに注目していくであろうし、倒置法、比喩、呼びかけ、協調、擬人法、・・・といった表現技法も思い出すことになろう。つまり、義務教育最後の年に、これまでの国語科学習の集大成として、新聞広告をつくるという活動を位置づけることができるのである。

なお、今回生徒が挑戦する新聞広告は新聞広告のコンクールであり、実際に出品をめざす。今年のテーマは「しあわせ」である。人間はしあわせを求めて生活をするものである。ではしあわせとは何か。一人ひとりの答えは違う。人間一人ひとりの持つ価値観の相違があるからこそ、人生は楽しいのである。国語の学習を通してことばを学ぶということは、一人ひとりのしあわせさがしにも直結する。しあわせとは何かを考えることは、これからをどう生きるか、人とどうつながるかという問題にもつながる。

さらに、2つの情報や学びを「つなげて」考えることにより、より深く、より広く学ぶことができる。

「しあわせ」をテーマとした新聞広告を作るという活動には、以上のような価値を見出すことができるのである。

2. 6 生徒の実態

これまで新聞記事は多く教材化してきたが、新聞広告を教材化することはなく、まして新聞広告を作るという活動は未経験の生徒が多い。

本校の2年生に位置づけられた「課題研究の時間」（「総合的な時間の一部」において、毎日広告デザイン賞の第2部、「発言広告の部」に応募した生徒は数人存在するが、このときは当然ビジュアルやデザインに力を入れており、キャッチコピー（ことば）にはあまり意識が向かなかったといっていだろう。

今回はことばのみによって新聞広告を作る。これによって、人を動かす「ことばの力」を強く意識することになるだろう。新聞広告を作る体験を持つ者は、その点ではプチ「エキスパート」であるが、ことばのみを使った新聞広告づくりという点では全員同じスタートということになる。

しあわせとは何か？を各自が書いて読みあったときに、その多様性に驚かされた。反面、「しあわせ」をテーマとした新聞広告作りにおいては、「しあわせとはこういうものなのです（定義付け）」「しあわせは身近にある」「不幸があるからこそ幸せがわかる」「辛い に 一 を足すと 幸せになる」といった、説明的なものに固まってしまう傾向がある。新聞広告では個性が求められるのだが、しあわせとは何かをまだよく考えていないのと、その表現方法が見つからないとで苦しんでいる状態にある。

だからこそ、仲間の作品を読み合い、意見交流をし、学び合う「場の設定」が求められるともいえる。

学習集団としての3年生は、好奇心旺盛な生徒たちである。男女の仲もよく、グループ活動においても相手を尊重しながら仲よく活動することができる。読解力や古文の音読力、発言力などについては個人差が大きい。諸活動や「さりはか一ど」による意思表示などには積極的に参加できる。周りの仲間に頼るよりは自分で考えようとする自主性もある。多少、考え方にかたさが見られるので、柔らかな発想力を持つ生徒を前面におしだし、仲間を認め合って活動を進められるよう、学びあいを活性化させていきたい。

2. 7 研究主題とのかかわり

学び合う姿には多様性がある。「生徒が作品と正面から向き合うことで、作品から学ぶ。」「生徒が教師から学ぶ。教師も生徒から学ぶ。」「生徒同士が刺激を受けて学び合う。」

このように、多様な姿が複雑にからみあい、様々な形の「学び合い」が可能になる。そもそも「学び合い」は、集団で学ぶさいには自然発生的にも起こるものであるが、それをさらに効果的に「学び合える」よう環境を整え、うながし、認めるのが、教師のつとめである。

単元をとおしての本実践で述べるならば、教師は以下のような場面で、「学び合い」を仕組んでいる。

- ・ネームプレートを黒板に貼り、自分の立場を意思表示したり仲間の考えを知ったりする。
- ・通称「さりはか一ど」（座席表型の自己評価）
- ・同じテーマ、あるいは違うテーマを選んだ者同士、あるいは近くの生徒同士がフリー・トーキング。
- ・プレゼンテーション（音声発表・レポート）など。

今回、国語科としての主題を「学び合いの中で伸ばす表現力」とした。生徒が「学び合う」ことの楽しさと達成感を実感できるよう、努力していきたい。生徒が「学び合う」ことの有意義性に気づけば、自発的にさらに深めていこうとする意志が生まれ、「生きる力」や「生涯学習」の力にもつながっていく。

エキスパートに関しては、新聞広告を作ったことがある生徒、やわらかな発想ができる生徒、語彙が豊富な生徒らがまわりの学習者に影響を与え、ともによりよい作品作りへ向かっていく場がそれにあたると考えられる。

今回の学習では各自の表現力が問われる。仲間の取り組みから大いに学び合い、表現力を高め合おうと努力し続けられるよう、教師が支援していく。

2. 8 自己評価座席表（通称さりはか一ど）（ミニ・ポートフォリオ）について

教師から見て、一枚で学習集団の到達度・全体的傾向・生徒の実態が把握できる。これを毎時間積みあげることにより、ポートフォリオともなりうるので、ひとりの学習者の学びの軌跡を知ることでもできる。生徒から見ると、全員の紙面発言の場となるので、意思表示や意見交流ができる。また、お互いの自己評価を知ることになり、評価の仕方も学んでいくことになる。（注1）

2. 9 単元の学習指導計画（10時間扱い）

- 第1次 『古今和歌集仮名序』の概要・万葉集（復習）・様々な新聞記事を読み、言霊信仰やことばの持つ力について意識する。（1時間）
- 第2次 『新しい博物学の時代』を読み、古代と現代、理科系と文系という、一見関係のないものをつなげることによって、新たな発見、深化・拡充が生まれることを読み取る。（1時間）
- 第3次 『伝え方が九割』の要点と「DJポリス」のことばがいかに合致するかを読みとり、人を動かすことばの力・巧みさを知る。（1時間）
- 第4次 「しあわせ」とは何かを考え、様々な文章を読んだり、自分なりに定義づけたりする。（1時間）

使用した文章 仕事に就くことや幸せ探しをすることについての様々な新聞記事・『心が軽くなるボタン108の教え 世界一幸せな国の97%幸せになる生き方』・『14歳の君へ どう考えどう生きるか』・マツコ・デラックスさんへのインタビュー記事・『哲学のおやつ 10代からの考えるレッスン 幸福と不幸』・『学校では教わらなかった人生の特別授業』・「しあわせとは何か」「ことばの力」について生徒から提供された、様々な新聞・雑誌の切り抜き

第5次 新聞作成と発表（6時間）

- 第1時 今回応募する 日本新聞協会 新聞広告 クリエイティブコンテストでの、過去受賞した優秀作品を鑑賞し、広告の作り方をイメージする。
- 第2時 付箋紙にかきたいことを書き出し、貼っていく。（構成）
- 第3時 付箋紙にかいたことを使い、作品化していく（下書き）
- 第4時 中間発表を通し、さらにことばを強い印象に作り変える。仲間のアドバイスを受け、加筆修正する。
- 第5時 作品をパソコン入力・印刷。 仲間の作品を鑑賞しあう。
- 第6時 （実際のコンクール受賞が決定してから）コンクール受賞作品を鑑賞しあい、自分や仲間の作品とを比べて分析したり感想や反省を述べ合ったりする。

2. 10 研究発表会で公開した授業本時の指導案
※ 中間発表と、それによってさらに加筆修正する場面を公開した。

11 本時の学習

- ① 本時の目標
・ 仲間が作った広告作品を読み、「ことばの力があるもの」「相手に伝えるためのアイデアがあるもの」「総合一位」の作品を選び出すことができる。
・ 仲間の作品のよいところを学び合い、自分の作品づくりに役立て始めることができる。

② 本時の展開

学習目標	学習活動	指導上の留意点	「学び合い」を促す場面/エピソード
1 前時の授業記録ノートの書かれた学習感想・学習感想書を読む	前時の授業記録ノートの書かれた学習感想を、本時の記録係が音読するのを聞き起こす	・ 前時の学習の思い起こさせることが目的である。と同時に、もし指導内容の不徹底が判明したら、教師のほうから補足説明する	・ 仲間との感想を聞くことで、自分の感想と比較する
2 前回はカード(自己評価)と「自己評価シート」を感想や質疑応答を話し合う	前時に仲間が書いた自己評価を読みあひだし、二人程度にしばって「自己評価シート」を感想や質疑応答を話し合う	・ 「さりはカード(自己評価カード)」について、今日の発見 4段階、かーりー授業理解度 4段階、人はずー今日の発見の中で心ゆくさぶを印刷したものを各自が小さい紙に書き、全員分を印刷すること、意見交流にもなるし、ミニポートフォリオにもなる。 ※今回は省略する。前は作品作成の活動中心だったため、「さりはカード」は書かなかったゆえである。	さりはカード(自己評価シート)を読みあひだし、仲間との感想や意見交流をする。その中の一部は、音声による意見交流となる。 ※今回は省略。
3 すてき言い換え作戦	・ 国語係が司会をする。教師の「御題」を素敵に言い換えて「黒板」に提示する。(五換え、語彙を増やす)	・ たとえば「仕事がいい」「丁寧にじっくり取り組む」という言い換えを言う。キャッチコピーには欠かせないことをポイントにしながら活動はことばの鍛えがいがある。	・ 代表で取り組む生徒。
4 「強いことば」の技術を知る	・ 佐々木圭一氏による「5つの技術」を紹介する。教師の話も聞く。	・ サブライズ法、ギャップ法、赤裸々法、リビート法、クワイマックス法については簡単に紹介する。これから「将来」に使えぬ技として意味を持たせるが、具体的な情報は与えることと混乱するからである。	・ 仲間とともに、教師の説明が実際体例がないか考えあう。
5 各自の作品を見直す(第一回)	・ 教師の話をもとに、自分の書き直し加筆修正をする。	・ ここで自分自身の手直ししようがない生徒がいるからである。	・ 個人作業ではあるが、話しあってもよい。
6 仲間の作品を鑑賞し、よいものを選ぶ	・ 机の上に置かれた作品を鑑賞し、選んだものにシールを貼っていく。	・ 赤いシール、「ことばの力にしました(心、動きました)」、黄色いシール、「アイデアに感服しました」。	・ 本時の中で、一番期待される場面である。各自の価値観をもとに選んでほしい。
7 仲間を選んで、シールを十枚以上もった作品を、賞状・分析する	・ シールを十枚以上もった作品を見直し、賞状・分析をする。	・ どの作品にも記入されたのか、あるいはどうして自分の作品が選ばれたのか、また選んでもらったことへの感謝、など、コメントはどんなことでもよい。	・ 仲間同士で賞状を渡す。賞状の書き方、賞状の内容、賞状の渡し方、などについて話しあう。
8 各自の作品を見直す(第二回)	・ この一時間の活動をもう一度、自分の書き直し加筆修正をする。	・ シールを一枚ももらえなかった生徒は困惑しているだろう。よって、必ず隣同士でコメントや相談をしようとする。自分自身の不備があることは認識できても、どうしてかまだ見えない生徒が多いと思われる。教師も机間指導をこまめに、生徒の質問に答えていく。	・ 一時間での学び、各自が受けた感想を話しあう。各自の作品について話しあう。各自の価値観をもとに選んでほしい。
9 本時の学習の思い起こし(「さりはカード」(自己評価シート))を書く	・ 本時の学習内容を思い起こし、各自が「さりはカード」を「さりはカード」(自己評価シート)を書く。	・ 各自が学習の振り返りを行う時間である。ここで書いたものは、次時のはじめに全員で検討することになる。	・ 意図交流するための資料となる。

観 点	評価 規 準
-----	--------

観 点	評価 規 準
心 語 への 関 心 意 欲	◎B 自分が作成中の新聞広告作品を、よりよい作品にしようとしてまわりと学び合ったたりより深く考えたりしている。
読 む 能 力	◎B 仲間の作品を読んで、「ことばの力があるもの」「相手に伝えるためのアイデアがあるもの」 「総合的にすぐれているもの」の観点からよいものを選び出している。
書 く 能 力	◎B 仲間から学んだことを自分の作品の質の向上のために使い、よりよい文章・表現・ことばを書き出すとしている。

3. 実践の流れ（概要）

3. 1 「ことばの力」を意識する面から

言霊信仰をはじめとして、ことばの持つ力を意識する体験は、生徒はこれまでの国語科学習の中でも何回もふれてきており、ある程度の意識の定着はあると考えられるが、本実践の中で強烈にことばがもたらす力の強さを目の当たりにする事件があった。

それは、後に「DJポリス」と呼ばれた警察官の誘導である。日本がサッカーW杯への出場が決定した日の夜、渋谷は興奮するサポーターたちで溢れた。その彼らをうまくさばいたのが、DJポリスの放送である。「皆さんは12番目の選手です。」「こんな良き日におこりたくはありません。私たちはチームメートです。どうか皆さん、チームメートの言うことを聞いてください。」「怖い顔をしたお巡りさん、皆さんが憎くてやっているわけではありません。心ではW杯出場を喜んでいるんです。」等（注2）の心憎いスピーチにより、「お巡りさんコール」が起き、一切逮捕者も出さずにたくさんの若者をさばいた。この「ことばの力」を分析したのだ。

さらに、ベストセラーとなった『伝え方が9割』（注3）という本に書かれた『「ノー」を『イエス』に換える技術』の中にある『「イエス」に変える3つのステップ』および『「イエス」に変える7つの切り口』を使い、DJポリスのアナウンスのどこが巧みであったかを再確認した。

また結果的に2013年の流行語大賞の1つになった「いつやるか？今でしょ」のことばについても扱った。私が考えるに、このことばの内容自体は昔から存在する。禅宗の道元禅師に関わる話の1つに「椎茸典座（しいたけてんぞ）」がある。道元禅師が中国に渡ってすぐのこと、2人の老典座から仏道修行の大事さを教えられた故事に基づき、道元禅師の著作『典座教訓』に見える。ひなたで苦しうに椎茸を干している68歳の老僧に道元が「もっと涼しくなってから仕事をしたら？」と言うと、「座云、更待何時。【座云く、『更に何（いず）れの時をか待たん』と。】【訳：いまやらずに、いつするのだ。】」（注4）という記述がある。

さらに時代が下って1970年代より、京都にある大徳寺大仙院の尾関宗園老師は、長年にわたって中学の修学旅行生に対し、「いま頑張らずにいつ頑張る！」と説き続け、全国の中学生を感動させてきた。（注5）

2013年に林修氏の「今でしょ！」が爆発的に流行して受け入れられたが、これはこれまで長く存在した有名なことばから順に並べてみると、「更に何れの時をか待たん（今やらずにいつするのだ）。」→「いま頑張らずにいつ頑張る！」→「いつやるか？今でしょ！」となり、ことばの前後を逆にしたものであることがわかる。前者2つのことばも多くの人々の心をゆさぶってきたわけだが、ことばの順を変えたただけで、今までよりはるかに多くの人を感動させ、流行語にもなった。これも「ことばの力」のなせる技である。

これらはまさに生徒の日常生活から発見した例だけに、生徒には既習の「ことばの力」の学習が非常に実感できた。「伝え方が9割」に書かれた項目に基づいてDJポリスや林修氏のフレーズを分析することで、さらに「ことばの力」の威力を実感すると同時に、どうすれば正確かつ効果的・印象的なことばにできるかという技を知り、がぜん、発言広告作りに意欲を持つようになった。

3. 2 「ことばの力」を意識した、「すてきに言い換え大作戦」の実施

ことばの力に興味・関心が高まったところで、何回か帯単元として「すてきに言い換え大作戦」ゲームを行った。ネガティブなことばをすてきに言い換え、最も上手な生徒をたたえ合う。毎時間初めの5分間を使って行った。（昨年の応募作品の中に、「高齢化社会」のことを「世界より10年長く恋ができる国」と言い換えた例があったことにヒントをいただいた。）

例1 「仕事がのろい」→「丁寧で質の高い仕事をしてくれる」

例2 「高齢化社会」→「しわの数だけ幸せがあふれてる」「熟練の技と経験の持ち主でいっぱい」

例3 「遊泳禁止」→「ここはサメの展示場」

例4「複雑」→「あれこれと 考えどころ もりだくさん」「何通りものつなげ方がある」

例5「不便」→「いろいろな工夫のしがいがある」「未来が楽しみ」

このゲームは大変生徒に喜ばれた。と同時に、「ことばを選ばなくては。」という意識が浸透するきっかけにもなった。

3. 3 「しあわせ」論から

今回生徒が挑戦するのは「しあわせ」をテーマとする新聞広告作りである。そのためには「しあわせとは何か」をつかまないといけない。わかったようでわからないものだけに、教師が用意したさまざまな「しあわせ論」の文章をよく読むのみならず、自主的に新聞記事や雑誌を提供する生徒も多かった。

日常生活の中から「しあわせ」探しをさせる期間(=取材)を設けた。しばらくは「そんなものないよ。」で終わったり、「〇〇をもらった。」と利益を得ることをしあわせと考えたりしているようだった。大きなできごとを「しあわせ」と考える生徒も多く、しあわせ探しは難航した。

そんなとき、ある女子がしあわせ探しカードの中に「強面のおじさんのかばんに可愛いストラップがついていた。」と書いてきた。これを学習集団に取り上げたときから、流れは変わった。生徒の視野が広がり、ほんの些細なことにもしあわせと感じさせるものがあるとする生徒が増えたのだ。

しあわせ論を学級で話し合う前の実態を紹介する。

【学習前】しあわせとは何か。

・欲が満たされたとき。 ・1・2年生の頃の自由。 ・お風呂などでゆったりリラックス。 ・友達や家族と笑って過ごせること。 ・心がほっと温くなるもの。 ・その瞬間がずっと続いてほしいと思ったらそれがしあわせ。 ・生きがいがあって気持ちが豊かなこと。 ・メールが来たりして、相手の中に自分が存在していること。 ・吉野弘『虹の足』のように自分には見えていないもの。テスト勉強なんて本人は書かないが、それができる人はしあわせだと思える人もいる。 等。

【しあわせとは何かを学級で話し合った後】しあわせとは何か。

・しあわせって人それぞれ。しあわせの感じ方も一人ひとり違う。 ・しあわせって何?って考えられること。 ・しあわせは不幸と隣り合わせだからこそ存在価値がある。 ・心があたたかくなること。 ・決して自由でさえあればいいわけではない。 ・欲を満たす感情と、心情の変化による感情の2種類がある。 ・プラスなことばかり考えていたけど、プラスのときはさほどしあわせを感じない。プラスとマイナスを感じてゼロになる時が一番しあわせを感じる。 ・幸せは意外と日常にあふれている。意外と身近にある。 ・しあわせって感じられることがしあわせ。 ・しあわせは本人にはわからず、他人には見えるというのに賛成(アフリカの難民から見た僕たち)。 ・生きていること。 等。

3. 4 学び合いの面から

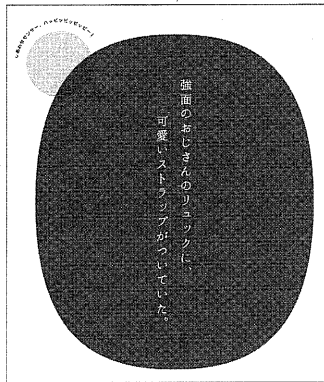
実際に広告を作るまでも「さりはかーど」等の使用により生徒同士は交流を深めてきたが、いざ広告を作る段階になると、まずは各自付箋紙の操作により構想を練った。それをもとに下書き。今回はキャッチコピーの部を目指しているので、絵や写真は入れず、ことばだけで勝負する。これもまた、何を主張するのか、どんなことばを投入するのか、一つひとつ自己対話が必要となる。そのうえで中間発表をし、学級間で投票したりよいところをコメントしたりした。これに大いに刺激を受けたうえで修正し、生徒は清書(パソコンを使用してのデータ入力)。大学の美術科の先生にお願いして学習者から指示された学年ベスト20を実際のコンクールに応募できる大きさに印刷していただくことになっていたのだ。具体的な目標が見え、各自がよく努力した。

一斉学習の中での学び合いと、作品を作りながらの学び合いとがあり、同じ目標めざして切磋琢磨し、時には仲間にも真剣に、自作に対しての感想や印象を求める姿もあった。

最後の発表会兼投票は学級ではなく学年すべての作品をもとに行った。ここでの反省では、作品を挙げた満足感や仲間の作品から刺激を受けての修正案が書かれた。その数か月後、コンクールの実際を受賞作品が発表されると、生徒の満足感はへし折れてしまった。生徒にも納得のいく、中学3年生では思いつかない発想の作品ばかりが並んでいたからである。これまでこのコンクールに中学生が応募し

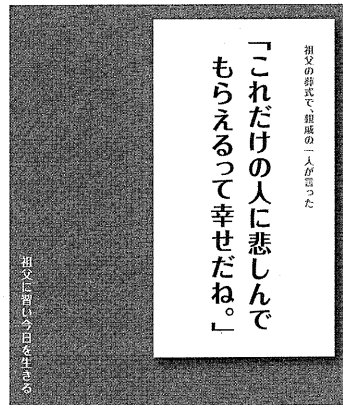
なるが、このようにあたりまえの生活を見直そうという姿勢を見せた作品は、多かった。その中でも、作品Aはたくさんの事例を見つけられたという点で、優れている。

作品B 「強面のおじさんのリュックに、かわいいストラップがついていた。」



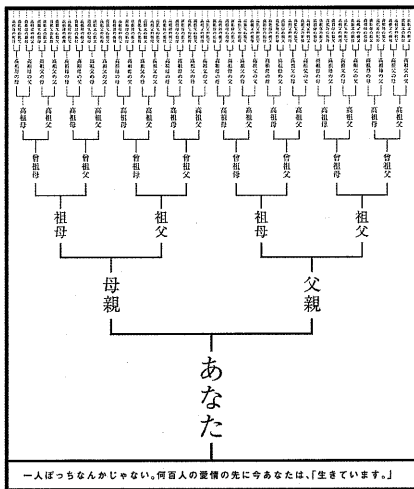
※
小さな発見をそのままキャッチコピーにした。
学年の生徒に身の回りの生活を見直す気にさせた大事な作品。

作品C 祖父の葬式で、親戚の一人が言った「これだけの人に悲しんでもらえるって幸せだね。」



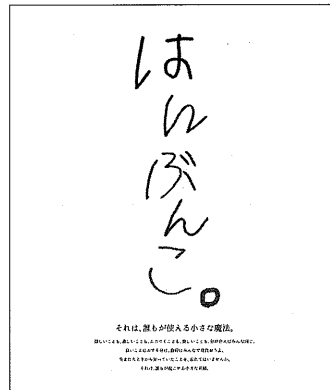
祖父に習い今日を生きる
※これも実体験から。幸せの真反対に思える葬儀から題材をとった。奥深い指摘は、仲間に目を見開かせた。

作品D 一人ぼっちなんかじゃない。何百人の愛情の先に今あなたは、「生きています。」



※たくさんの味方を得て、元気になれる作品。多くの共感を得た作品。

作品E はんぶんこ。それは誰もが使える小さな魔法。嬉しいことも、悲しいことも、ムカつくことも、楽しいことも、分け合えばみんな同じ。良いことはお

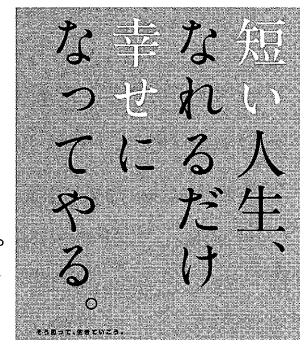


すそ分け。重荷はみんなので背負おうよ。生まれたときから知っていたことを、忘れてはいませんか。それは誰もが起こせる小さな奇跡。

※多くの共感あり。

作品F 短い人生、なれるだけ幸せになってやる。
—そう思って、生きていこう。

※中学生らしいストレートな表現。それだけに強さも伝わってくる。



【引用・参考文献】

- 注1 「さりかど」については、例えば以下を参照されたい。『学び合いで輝く・伸びる・高め合う 東京学芸大学附属小金井中学校の教育』東洋館出版社2007年11月22～23ページ
- 注2 毎日新聞 2013年6月6日 の記事 より。(このほか、生徒が集めたさまざまなニュース・インターネットの情報も活用した。)
- 注3 『伝え方が9割』 佐々木圭一 著 ダイヤモンド社 2013年2月発行 別丁より
- 注4 『典座教訓』 73～76 道元 著
- 注5 『不動心』・『新・いま頑張らずにいつ頑張る！尾関宗園の生き方語録』などより。 尾関宗園 著